

日本型 人道援助レシピのエッセンス



大阪大学大学院
国際公共政策研究科
教授

星野俊也



人道援助における日本の「レシピ・ブック」には、さまざまな具材や調味料を絶妙に組み合わせるアイデアや工夫が散りばめられている。その一つひとつのレシピをひも解くと、どんな逆境にあっても、そして、思うように道具や素材が揃わなくても、へこたれない芯の強さが垣間見える。この「レシピ」プロジェクトの着想につながる仮説—すなわち、日本人の価値観が人道行動において一定の強みになっているのではないかという認識—は、まさに人道援助に精魂を傾けてきた一人ひとりのリーダーたちの活動によって証明されている。彼／彼女たちの行動は、相手に対する「繊細さ」—言い換えるなら、きめ細やかな思いやりや気配り—に満ちていた。この姿勢こそが日本のレシピのバックボーンであり、信頼の拠り所になっていたといえるだろう。

人道援助が求められるような状況は、私たちの日々の生活と比較をすれば「非日常」的な状況である。人々の「Life (生)」そのもの、つまり、生命・人生・生活の歯車は完全に狂ってしまう。その原因は、人為的な紛争もあれば、自然災害によるもの、さらにはその両者が複合したものなどと、さまざまである。だが、そうした事態は、不幸にも世界各地で引きもきらず発生している。もちろん、その（ごくごく限られた）一端は、お茶の間のテレビや新聞などでも伝えられるが、多くの人々は、ほんのわずかな時間、遠い国での現実を気に留めはしても、再び自らの「日常」に戻っていく。そうしたなか、1970年代の後半、戦争や政治的迫害で国や故郷を後にせざるを得ず、小さな船（それは、まさに「ボート」にほかならなかつた）に乗ったあふれんばかりの難民（「ボートピープル」）

が荒波を越え、日本の近海にまでやってくるという異常な光景は、日本でも心ある人々を動かさずにはおかなかった。こうした「ボートピープル」や、その発生地となったインドシナ地域での難民の人々への人道救援のためのボランティア活動が、あらゆる意味で今日の日本の市民社会によるNGO活動の原点になっている。

1980年代、1990年代、2000年以降と、世界各地で人道援助、難民支援に取り組んだ仲間たちの活動や声から共通して浮かび上がってくるものは、絶えず援助を必要とする人々と同じ目線に立ち、苦しい立場にある人々に救いの手を差し伸べる「保護」のための活動とともに、現状の打開と将来に向けた希望に道を拓くため個々人の潜在力を最大限に引き伸ばす試み、すなわち「能力強化（エンパワーメント）」のための活動の数々であった。これは、今日、「人間の安全保障」という理念に凝縮されるようになったボトム・アップ型の行動がすでに実践されていたことを物語っている。

紛争に起因する人道危機において、人道援助は必要条件ではあっても、残念ながらそれだけでは十分条件にはなりえない。なぜなら、紛争は、得てして社会・経済的あるいは民族・宗教的な理由に加え、きわめて政治性の高い

問題を内包しているからである。その意味で、私たちには、人道援助を超え、さらに根源的な問題解決にまで仲介努力をする営みなども今後は求められることになるだろう。また、難民支援の観点からは、日本での定住を希望する難民をしっかりと受け止める環境をよりよくしていくことも期待されている。

だが、人道援助そのものについても、もとより「完成型」はない。日本のレシピのスタイルやそれに対する信頼は、常に対象となる相手の人々とのコミュニケーションや対話のプロセスのなかから発展してきたものである。振り返るとそれは相互学習のプロセスでもあり、相手のための「レシピ」のほがいつの間にか自分を成長させてきたことにも気づかされる。過酷な境遇のなか、人道援助における真心のこもった「日本のレシピ」を探求することは、実は「共通の幸せのためのレシピ」の探求につながっているのかもしれない。

Profile

（ほしの としや）

大阪大学大学院国際公共政策研究科教授。上智大学卒、東京大学（学術修士）、大阪大学（国際公共政策博士）。在米日本大使館専門調査員、プリンストン大学客員研究員、日本国際問題研究所主任研究員などを経て現職。日本平和構築ネットワーク代表、日本UNHCR協会理事など兼任。共著書に「人道危機と国際介入」など。現在は日本政府国連代表部参事官として出向中。